

6 『アニメの魂
——協働する創造の現場』

日本のアニメはなぜ世界で注目を浴びるのか。アメリカの文化人類学者である著者は、制作現場から海外ファンの活動まで、広範なフィールドワークを通して、互いが作品の創造に影響を与え合う「つながりのエネルギー」を見出す。海外ファンが作品に独自に字幕をつける「ファンサブ」についても、批判と肯定を交えた考察を行う。

イアン・コンドリー=著 島内哲朗=訳
NTT出版／2014年



7 『美術館と大学と市民がつくる
ソーシャルデザインプロジェクト』

東京都美術館と東京藝術大学が手を組む「とびらプロジェクト」。学芸員や大学関係者、一般から募った「とびラー」たちが、美術館を拠点とした文化資源を活かしながら、人、作品、場をつないでいくさまざまな活動を行う。既成概念にとらわれる必要のない美術を介してこそ生まれる「コミュニティの質」のあり方が学べる。

稲庭彩和子・伊藤達矢=著 とびらプロジェクト=編
青幻舎／2018年



8 『伝統芸能の革命児たち』

十三代目市川團十郎白猿の襲名を控えた市川海老蔵、講談界に旋風を巻き起こしている神田伯山らに代表される若い力の輝きを、伝統芸能の最前線を見つけてきた著者がつぶさに描いた評論集。能・狂言・文楽・落語・浪曲・新派と、幅広い舞台芸術を扱うなか、今号で紹介する『ART歌舞伎』『図夢歌舞伎』など、最新の動向にも目配りされた取材と筆力が光る一冊。

九龍ジョー=著
文藝春秋／2020年



9 『新型コロナはアートをどう変えるか』

洋の東西を問わず疫病を克服する過程で、新たな芸術作品が生まれてきた事実がある。その歴史的経緯を振り返りながら、ポスト・コロナ時代のアート市場を、データや事例を交えて大胆に予測。さらに、急激な変化に対応しながら、前向きな表現を発信する現代アーティストの作品を紹介するなど、これからのアートシーン、ひいては社会の方向性を概観できる一冊。

宮津大輔=著
光文社新書／2020年



10 『松竹と東宝
——興行をビジネスにした男たち』

日本映画・演劇界の両雄「松竹」と「東宝」の攻防を軸に、同時代に生きた役者や興行主の人間模様を描く近代興行史。歌舞伎界を制した松竹兄弟と宝塚歌劇の生みの親である小林一三は、しのぎを削りながらも、魑魅魍魎が跋扈する興行界に新風を吹き込んだ。手に汗握るせめぎ合いは冒険活劇さながらの様相を呈する。

中川右介=著
光文社新書／2018年



1 『文化国家と「文化的生存配慮」
——ドイツにおける文化政策の理論的基盤とミュージアムの役割』

藤野氏(26頁)が取り上げるドイツの「文化的生存配慮」の理論を、詳細に分析する。ドイツの事例が中心だが、ハコモノ行政などにみられる「文化政策をめぐる日本の課題や関心」を踏まえた視点が加えられているため、民主社会を支える文化の存在意義や、公共文化施設の必要性について、わが事として改めて熟慮できる。

秋野有紀=著
美学出版／2019年



2 『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために
——その思想、実践、技術』

精神的、身体的、社会的に「よい状態であること」を意味する「ウェルビーイング」の概念に注目する本書。その目的は、従来の金銭的、経済的、権力的に達成される「私の幸福」を「私たちの幸福」に変えていくこと。そこでは「つながり」こそが大きな役割を果たすという本書の主張は、内田氏の論考(20頁)とも強く結びつくはずだ。

渡邊淳司、ドミニク・チェンほか=監修・編著
ビー・エヌ・エヌ新社／2020年



3 『芸術文化の投資効果
——メセナと創造経済』

企業メセナの現場で長年にわたり活躍してきた著者が100社を超える事例を挙げながら、その投資効果を書く。冒頭で紹介される経済学者、ジェイソン・ボッツの「文化芸術への投資は、研究開発への投資とまったく同じ」という言葉も、詳細な事例を見るうちに説得力を増す。歴史的な変遷も理解でき、企業メセナの入門書として役立つ。

加藤種男=著
水曜社／2018年



4 『人の心を動かすことができれば、芸術ではない。
——連続講座「芸術は何処へ？」』

人間にとって「芸術」がもつ意味とは? 「芸術」はこれからどこへ向かうのか? —2017年から連続9回行われた公開講座の記録。専門の研究者と多数のアーティストが参加した白熱のパネルディスカッションは、ポスト・コロナの芸術を考えるうえで必読の内容。経済学者や動物行動学者など、専門外からの視点も示唆に富む。

高階秀爾=編著 京都府立文化芸術会館=企画
ミネルヴァ書房／2020年



5 『小林一三は宝塚少女歌劇に
どのような夢を託したのか』

「真面動物園」「こども博覧会」「お伽芝居」「宝塚歌劇」……。鉄道事業を核とした都市計画を実現していくなかで天才経営者が次々と世に送り出したのは、大人から幼子までを夢中にさせる娯楽の数々だった。当時の世相を辿りながら、阪急阪神東宝グループの創始者・小林一三が抱く「家族団楽」の希求と演劇愛に肉薄する。

伊井春樹=著
ミネルヴァ書房／2017年



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

未来を見据え、 新しい文化芸術のかたちを 考えるための10冊

コロナ禍のなか、文化芸術の価値や果たす役割が問い直されています。
今号で紹介した事例の理解を深める10冊を選びました。